

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02667

研究課題名(和文) スペイン語圏における俳句受容プロセスの深化と歳時記編纂についての研究

研究課題名(英文) A study on the deepening of the haiku reception process in the Spanish-speaking world and the compilation of the saijiki

研究代表者

井尻 香代子 (Ijiri, Kayoko)

京都産業大学・文化学部・教授

研究者番号：70232353

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：スペイン及びアルゼンチンにおける俳句受容の深化について、季語システム理解という観点から研究を進め、歳時記編纂へのプロセスを調査した。両国のそれぞれ3地点で現地調査を実施した結果、季語システム理解の深まりと共に現地固有の多様な季語の生成が確認された。その結果、スペイン語圏ハイクの詩学が変化し、人と自然の共生に向けた自然観の変容が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

俳句は世界的に受容され、研究及び実作が急速に進展している詩的ジャンルである。これまで短詩型や仏教思想との関わりが注目されてきたが、日本の伝統詩が継承する季語システムの受容については十分な分析がなされていなかった。本課題では、スペイン語圏における季語システム理解と歳時記編纂に踏み込み、ハイクの詩学と自然観の変容について現状を明らかにすることができた。

また、日本国内では日本の文芸の海外普及について未だあまり認知されていないが、本課題に関して公刊した論文や著作によって海外ハイクの現状を広く知らせることに貢献できた。

研究成果の概要(英文)：I studied the deepening acceptance of haikus in Spain and Argentina from the viewpoint of understanding the kigo (season words) system, and investigated the process of compiling the saijiki. As a result of conducting field surveys at three locations in each of the two countries, it was confirmed that the understanding of the season word system has deepened and that there has been a generation of a variety of season words peculiar to each region. As a result, the poetics of the Spanish-speaking haiku has changed, and the transformation of the view of nature toward a coexistence between humans and nature was confirmed.

研究分野：比較文学 スペイン語圏文学

キーワード：スペイン語圏 俳句受容の深化 季語システム ハイクの詩学 自然観の変容

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の伝統詩歌は19世紀末に翻訳されてヨーロッパに紹介された。フランスのジャポニスムからヨーロッパ各地に伝播した経緯は柴田依子『俳句のジャポニスム』(2010年)に、来日した英語圏の外交官や研究者の俳句研究については、内田園生『世界に広がる俳句』(2005年)の考察がある。現在、多くの言語で短歌や俳句などの詩型が受容され、句集や雑誌が出版されている。海外での日本文学研究も近年飛躍的に進み、ドナルド・キーンやハルオ・シラネ等多くの欧米研究者が、綿密な日本語テキストの分析に基づきつつ、従来の国文学研究には馴染まなかった記号論やエコクリティシズムの理論を導入し、興味深い研究成果を挙げている。

こうした流れの中で、個々の作家の作品だけではなく、シラネが「偉大な季節・地誌のアンソロジー」と呼ぶ「詩的トポスと連想のより大きな集合体」即ち、季寄せや歳時記の存在に注目するようになった。連歌・俳諧論集を対象とする詩学の研究も深められている。これらの研究成果の実践例として、最大の英語俳句人口を擁する米国では、1996年に国際俳句歳時記である Haiku World - An International Poetry Almanac (ウィリアム・J・ヒギンソン)が刊行されている。

(2) スペインと北中南米を中心に広がるスペイン語文化圏では、植民地時代から現在まで、いくつかの文学活動の拠点が連携しつつ、作品や研究の出版・流通が行われてきた。その最大のものとして、スペイン、アルゼンチン、メキシコを挙げることができる。日本文学の受容、研究、翻訳をめぐる活動も、これらの地域を中心に始まり、相互に影響を及ぼしつつ展開している。

スペインでは、19世紀末にフランスのジャポニスムの影響により、フアン・ラモン・ヒメネス、アントニオ・マチャド、フェデリコ・ガルシア・ロルカらがスペイン語俳句制作を試みて以来、日本の詩歌に対する関心が継続し、スペイン語俳句や短歌の制作や研究が行われてきた。これらの詩人たちは、スペイン語詩の革新運動であったモデルニスモやそれに続く前衛が求めた「新規なもの」として日本の俳句を捉えた。スペイン詩人による俳句受容については、田澤佳子『俳句とスペインの詩人たち マチャド、ヒメネス、ロルカとカタルーニャの詩人』(2016年)がある。その後1960年代から少数の詩人たちの実験的な試みとして俳句が姿を表し、1976年にはフェルナンド・ロドリゲス＝イスキエルドによる研究書『日本の俳句』、1983年にはアントニオ・カベサスによる日本の俳句アンソロジー『不滅の俳句』、1985年にはペドロ・アウジョン・デ・アロのスペイン語俳句史『スペインにおける俳句』が出版され、1990年代以降、日本文学作品翻訳書、スペイン語短歌や俳句の作品集が次々と出版されている。

アルゼンチンでは、スペインの前衛やモデルニスモ運動の影響に加えて、日本人移民によるスペイン語俳句普及活動、アルゼンチン文学者ホルヘ・ルイス・ボルヘス、アドルフォ・ピオイ・カサレスらの日本文学への関心によって、1950年代から民衆的な性格を持つアルゼンチン俳句が生成した。1990年代からアルゼンチン人作家によるスペイン語短歌、俳句、川柳の詩集出版が本格化、1995年にはホルヘ・ルイス・ボルヘス国際財団の全国俳句コンクール開催、2000年からは東西国際財団による国際俳句学会が隔年で開催されている。研究代表者は2009年から5年間、研究課題「アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容と価値観の変化についての研究」に科学研究費補助金を得て取り組み(基盤研究C、課題番号:21520386)、アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容プロセス、アルゼンチン俳句の季語および韻律、俳句受容による価値観の変容などについて研究を進めてきた。2014年には在亜日本大使館、京都府連句協会、東西国際財団共催による「京都府連句協会『連句』アルゼンチン・レクチャー・ワークショップ」が4会場で実施され、スペイン語歳時記構築に向けての計画が加速している。

## 2. 研究の目的

俳句が明治開国と同時にヨーロッパに紹介された際、最も注目を集めたのは「世界最小の詩」とされた詩型であった。現在、日本の伝統詩歌は多くの言語に翻訳され、他文化圏での日本文学研究は急速な進展を見せている。こうした状況の中で、スペイン語圏では歌論、連歌論、俳論によって継承されてきた「季題・季語」のシステムへの関心が高まっている。「世界最小の詩」である俳句が、他の言語に移されてもなお独立したジャンルとして成立し、広く受容される理由の一つが季語の存在にあることが認識され、独自の歳時記編纂が始まっているのである。本研究では、この歳時記編纂に至る俳句受容プロセスを切り口に、スペイン語詩に生じた詩学や自然観の変化を解明することを目的とする。

## 3. 研究の方法

本研究は社会情勢の変化により、当初の3年間で6年間に延長して実施した。

(1) スペインではマドリッド、バルセロナ、アルバセテ、パンプロナ、サンティアゴ・デ・コンポステラの現地調査、アルゼンチンではブエノスアイレス、トゥクマン、サルタの現地調査を実施し、研究者・詩人への聞き取り調査、講演、セミナー及び文献資料収集を行った。また、熊本の「草枕」国際俳句大会関係者への聞き取り調査を実施した結果、当大会にスペイン語部門を開設することとなり、調査の深化につなげることができた。

(2) 上記で収集した文献、資料、情報の整理と分析、また、スペイン語短歌、俳句、連句の詩集や関連のウェブサイトも視野に入れながら、そこに反映されている詩学や自然観の変化について分析し、その結果を公刊した。現在、新たな論文を準備中である。

#### 4. 研究成果

(1) スペイン語ハイクを受容がスペインやラテンアメリカの市民の間に広がった 1990 年代から 30 年以上が経過した。本課題の研究を通じて、スペイン語ハイクの詩学は初期の形式面（韻律、修辞）に偏った受容を超えて、ここ 10 年ほどは内容（季語、自然との関わり、写生）の重視へと確実に変化してきたことが確認できた。とりわけ季語の認識の変化は、研究書、小中学生対象のハイク教育関連書、ハイク集、コンクールの入賞作品集に明確に表れている。

2013 年にマドリードで出版された太田靖子、エレナ・ガジェゴ共著『季語 日本の俳句における季節の言葉』はフェルナンド・ロドリゲス＝イスキエルドの日本の詩歌における季題・季語の解説を序文に収め、「例句を伴った季語辞典の要約」または「ミニ歳時記」であると著者自身が述べている。この著書によって、既にスペイン語圏の人々によく知られた江戸期の作品から、未だ翻訳されていない現代俳句に至る 91 名の俳人の作品と、その中で季語が果たしている役割が解説され、俳句における季語の機能について、スペイン語圏における理解は格段に深まったと考えられる。また、著者はスペインの風土に相応しい季語や歳時記が構築されることを勧めている。

2012 年にブエノスアイレスで出版されたローラン・L・パシエンテ著『ハイク教育の提案と作品集』では、変化する自然と人々の生活に作品をつなげる要素として指導の初めに「基本季語リスト」が提示されている。この著作では、ブエノスアイレス州の学校の所在地の年間を通しての気候や生活の変化に合わせた季語が選ばれており、南半球の気候や動植物相が興味深い特色を示している。

また、スペイン語圏の国々は歴史的に農牧業の盛んな地域であった。この特色が現代生活を送る市民のハイク季語の多様性に関わっていることが徐々に明らかになってきた。スペインのキリスト教徒は 8 世紀から 15 世紀までイスラム教徒やユダヤ教徒との共生の時期を過ごした。レコンキスタ(国土回復運動)の時代にあたるが、自然科学や人文学において重要な交流が行われ、その結果は生活文化のレベルに深く浸透していた。その例の一つとして、アンダルシア地方コルドバで 961 年に編纂された『コルドバ歳時記』の存在がある。そこには、祝祭日や行事、健康を保つ知恵、家畜の移動や管理、農事作業や日常生活のリズムが刻まれ、これらの暦に基づいた伝統的生活習慣は民間の智恵として現在まで受け継がれている。アメリカ大陸の征服と植民地化により、新大陸で農牧業を営んだ移民たちは、スペイン語と共に暦や生活習慣を持ち込み、異なる風土に適應していった。宗教や農事と結びついたこのような暦を持つ文化的土壌は、詩歌においても季語や歳時記ときわめて相性の良いものであったと思われる。

(2) スペイン各地での現地調査によって収集した文献資料に基づき、2015 年～2019 年に出版された個人句集及び結社のアンソロジーを分析した。まず、スペインの気候区分は全域が温帯に属するが、大きく西岸海洋性気候と地中海性気候に分かれる。同じ気候区分でも、気温差の穏やかな沿岸部と激しい内陸部では四季の変化に対する意識が異なり、季語の使用頻度や割合にも違った結果が出た。今回はハイク実作の盛んな四区域（バスク、ガリシア、バレンシア、カスティーリャ）に分けて分析を行った。各地域の地理的特徴は以下のとおりである。バスク：スペイン北東部/西岸海洋性気候、ガリシア：スペイン北西部/地中海性気候、バレンシア：スペイン東部沿岸/地中海性気候、カスティーリャ：スペイン中央内陸部/地中海性気候。まず、全作品中、一定の季節を示す季語のある有季ハイクの割合は、バスク 77.70%，ガリシア 40.00%，バレンシア 30.80%，カスティーリャ 50.70%であった。次に、有季ハイクのうち、作品中の季語がどの季節を示すかを分析し、右記の円グラフ（図 1～図 4）の結果を得た。

スペイン語ハイクの北部拠点があるバスク地方パンプونا市はピレネー山脈に近い山岳地域にある。降雨量が多く、グリーンスペインと呼ばれる。また、姉妹都市である山口市との連携により日本文化関連の蔵書を豊かに備えたヤマグチ図書館があり、日本との文化交流イベントも盛んである。有季ハイクが四分の三を占め、「霜」「初雪」「ヒースの花」等、冬の季語数が際立って多かった（図 1）。一方、大西洋に面したガリシア地方の有季ハイク率は 40%と下がるが、季語のうち春夏秋冬の割合は最もバランスが良く、降雨量が豊かなところから「蕪の花」「ジャズミン咲く」「栗の実」「枇杷の花」等、各季節の植物名や、「耕す」「休耕田」「秣刈る」等、農事に関する季語が特徴的であった（図 2）。これに対し、地中海に面して日照

図 1 バスクの季語の割合

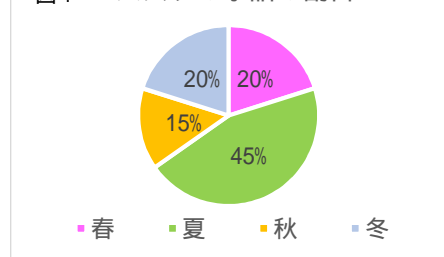
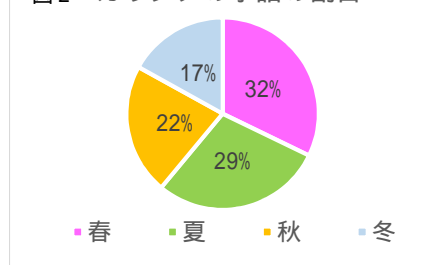


図 2 ガリシアの季語の割合



時間が長く、春から秋にかけて快適な気候が続くバレンシアでは、有季ハイク率は三分の一ほどに留まり、夏の季語が豊かで、「守宮」「黄金虫」「天道虫」等の小動物や「ブーゲンビリア」「ラベンダー」「ポピー」の花等、多様な素材が用いられた作品が見られた（図3）。また、スペインで最もハイク・コンクール、ハイク関連書籍の出版、ハイク講座等が多く開催されているカスティーリャ・ラ・マンチャ地方のアルバセテでは、有季ハイク率は半分強に達し、冬の季語はやや少なめだが、四季それぞれの季語が開拓され、それらの季語を用いることによって地域ならではの季節の変化を具体的に詠ったハイクが多くあった。春には「コウノトリ帰る」、夏には「木苺の花」、秋には「聖ミカエル日和（小春日和）」、冬には「チョウゲンボウ」等、自然と地域の生活が結びついた季語の用法である（図4）。

このようにスペインでは近年、ハイクは「自然を詠む詩」であるとの理解から、「自然と人が紡いできた関わりを表現する詩」へと変化しつつあり、季語はそれによって表された事物だけではなく、より広く深い意味を持つ詩的言語の目録であるとの認識が共有されてきたと考えられる。

（3）2017年にアルゼンチン各地で収集した文献資料及び現地でのインタビューに基づき、2015年～2019年出版の個人ハイク集とブエノスアイレス、トゥクマン、サルタでの聞き取り調査結果を分析し、円グラフに示した（図5～図6）。アルゼンチンの気候区分の大半は四季のある温帯に属するが、国土は亜熱帯、温帯、乾燥帯、寒冷帯の四つの区分にまたがっている。2017年に聞き取り調査をしたこれら3都市のうち、ブエノスアイレスはラプラタ河口にあり温暖湿潤な温帯にあるが、トゥクマンやサルタ等北東部は高地の乾燥帯にある。いずれも日系人協会による文化活動が続けられていることから現地調査を行ったが、ブエノスアイレスを除き、詩作に関してはほぼ現代詩のジャンルが対象であった。そこで、3都市での俳句の季語に関する講演会とワークショップ実施後に、アルゼンチンの現代詩人の作品に現れた「季節の言葉」についてデータを集めた。参加者たちが「自然描写が優れている」として選んだ11人の現代詩人は、フリオ・コルタサル、マセドニオ・フェルナンデス、アレハンドラ・ピサルニク、ファン・ホセ・サエル、アナ・マリア・シュア等であり、全員が首都ブエノスアイレス、ロサリオ等の年間を通して湿潤なパンパ地方で活動していた。作品分析の結果は四季がはっきりした気候にも関わらず、「トックリヤシの花」「ハチドリ」「セイボ」など固有の動植物を含んだ夏の言葉が四分之三を占め、その他は「牧場のクローバー」等の春の言葉が20%弱であり、早い季節に集中して自然が描かれていることが見て取れた（図5）。

アルゼンチン・ハイクの季語については、研究代表者の2009年～2013年の基盤研究（C）課題名「アルゼンチンにおける日本の詩歌の受容と価値観の変化についての研究」において、季語の用法の調査を実施した。2000年～2012年に出版された個人ハイク集の調査結果では、全作品のうち、一定の季節を指示する季語を持つ有季ハイク率は15%に過ぎなかった。そこで今回は、内陸のパンパ地方にあるコルドバで2015年以降に出版されたハイク集を分析し、その結果と比較した。コルドバのハイクでは、全作品のうち有季ハイクが68%に上り、季語の割合は秋がやや少ないものの、ほぼ同じ割合となっている。春の「ラパチョ咲く」、夏の「麦熟す」、秋の「フェリア（祭）」、冬の「枯庭」等、季節に添って変化する日々の暮らしが描き出され、スペイン語ハイクの新しい詩学がこの結果には明確に反映されている（図6）。

図3 バレンシアの季語割合

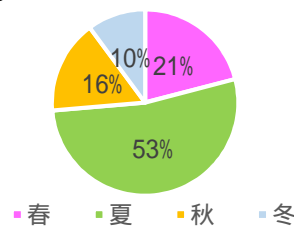


図4 カスティーリャの季語割合

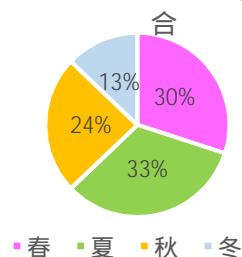


図5 パンパ現代詩人の季語割合

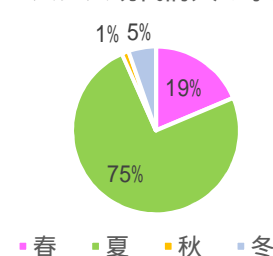
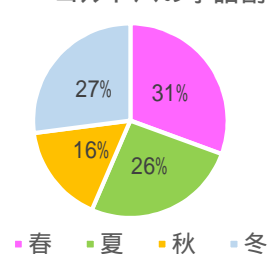


図6 コルドバの季語割合



アルゼンチン現代詩人の作品及びコルドバのハイク集を対象にした季語(季節の言葉)分析結果からは、現代詩全般におけるハイクという詩的ジャンルの特徴が際立つ結果となった。アルゼンチンの現代詩においては自然の要素は、春や夏といった明るく喜ばしいとされてきた季節に集中し、他の季節にはあまり言及がないことがわかった。一方、ハイク作品では四季それぞれの自然の要素を取り入れるという段階から、さらに進んで、常に変化する自然環境の中で生活する人々の生活を四季というサイクルの中で捉える段階へと深化していると考えられる。スペイン語ハイクが五七五音節という形式のみならず、内容的にも独立したジャンルとして確立している状況が見えてきた。

(4)これまでの研究によって、スペイン及びアルゼンチンのハイクの詩学の変容が明らかになった。まず、季語のシステム及び季語が非常に短い詩型において果たす機能の理解が広まった。日本及びスペイン語圏の研究者は、日本の伝統詩歌において季語が果たしてきた役割を専門書において解説し、また、日本の俳句作品の翻訳者は個々のケースにおいて季語がどのように機能しているかを注釈してきた。次に、日本の季語システムを各地域の風土や文化に相応しいものとする「スペイン化」「アルゼンチン化」の進展である。各地の実作者は自身が生活する場所において生起する四季の変化に添って、宗教暦や農事暦を見直し、季節の行事や作物の作付から収穫、動植物相の変化を注視するようになった。これによって、地域固有の季語が生まれ、ハイクに反映されるようになっていく。そうした季語が徐々に共有される状況は、小中学校のハイク教育に用いられる季語リストにも見ることができる。

このように、季語システムの理解の深まりはハイクの詩学の変容につながっている。日本の俳句との出会いにおいては、スペイン語ハイクは短詩型の自然賛歌と考えられたが、やがて人間と自然との関わり、ひいては生態系全体への眼差しを持つジャンルとなりつつある。ハイクの詩学の深化はまた、自然観の変化とも連動している。15世紀の国土回復運動の終了と新大陸の征服開始以降、急激に進んだ近代化の流れの中で、中世スペインの農事暦や新大陸先住民の宗教暦は背景に退き、これらの暦に添って行われた行事・耕作・生活は単なる民間伝承として伝えられてきた。遥かな記憶として残っていたこれらの伝統的生活習慣は、環境破壊や気候変動が喫緊の課題となるにつれて再び見直されている。日本の俳句受容の深まりは、このような自然観の変化とも密接につながりつつ、自然と人間との共生を求める詩学としてハイク作品の中に反映されている。スペイン語圏における俳句受容は、季語理解の深化によって新たな展開を見せているが、歳時記編纂という段階に至るには、スペイン語ハイク実作がさらに普及し、スペインにおいてもアルゼンチンにおいても季語及び作品の層が積み重なっていくことが必要と思われる。研究代表者は本課題によって得られた知見を論文として段階的に公刊中である。また、今後もスペイン語ハイクの発展を注視し、歳時記編纂へのプロセスを検証していきたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 井尻香代子	4. 巻 16
2. 論文標題 スペイン語俳文学の現状について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都産業大学総合学術研究所所報	6. 最初と最後の頁 131-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kayoko Ijiri	4. 巻 94/95
2. 論文標題 Lo que significa la forma de Haiku	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Barcarola	6. 最初と最後の頁 305-311
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井尻香代子	4. 巻 56
2. 論文標題 海外における俳句受容プロセスの深化について（スペイン語圏を中心に）－俳句・ハイクの形式－	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都産業大学論集人文科学系列	6. 最初と最後の頁 111-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kayoko Ijiri	4. 巻 100
2. 論文標題 Formacion y difusion del Haiku desde el punto de vista ambiental	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Barcarola	6. 最初と最後の頁 341-349
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Kayoko Ijiri
2. 発表標題 Literatura Hai actual en espanol
3. 学会等名 Encuentro Internacional de Haiku (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 井尻香代子
2. 発表標題 アルゼンチン文学につながる日本文学
3. 学会等名 在垂日本大使館文化広報センターセミナー (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井尻香代子
2. 発表標題 アルゼンチン文学につながる日本文学
3. 学会等名 トゥクマン国立大学学生センターセミナー (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井尻香代子
2. 発表標題 日本の季語と歳時記の発展
3. 学会等名 アルバセテ・ハイク協会研究部会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 青山和夫 穠原三佳 浅見恵理 網野徹哉 新井隆宏 荒木秀和 荒田恵 アンジェロ・イシ 安保寛尚 池田光穂 生月亘 石井昌幸 石黒侑介 井尻香代子 他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 780
3. 書名 ラテンアメリカ文化事典	

1. 著者名 井尻香代子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 248
3. 書名 アルゼンチンに渡った俳句	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	アクニャ ソッチ ステラ マリス  (Acuna Zocchi Stella Maris)	東西学院	
研究協力者	パラシオス デ コシアンシ リリアナ  (Palacios de Cosiansi Liliana)	トゥクマン国立大学	
研究協力者	ロビラ ヒル エリアス デル コンスエロ  (Rovila Gil Elias del Consuelo)	カスティーリャ・ラ・マンチャ大学	

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

## 〔国際研究集会〕 計0件



## 8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
アルゼンチン	東西学院	トゥクマン国立大学		
スペイン	カスティーリャ・ラ・マンチャ 大学			